



新入会員紹介

齢を重ねた今も憧れのままで、自信を持って、「私の詩」と言える作品にたどりつけるまで、書き続けようと思っています。



自己紹介

川崎芳枝

私が、初めて「詩」を意識した瞬間は、中学生の時でした。「思っていることを書きなさい。」と先生に指示されて、短い文を書きました。それが、全校朝会で「こういう詩がある。」と紹介されたのです。

それ以降、感じたことや想いを、自分自身と出会うために書いてきました。作品が作れなかった長い期間もありましたが、書きためたものを、二年前に詩集『未明 燃えて』にまとめました。深く豊かな成熟したことが、私を超えて降り注ぐ情景は、年



自己紹介

飛松裕太

この一、二年ほど中上さんにお誘い頂き、朗読会やその他のイベントに部外者ながらこっそり参加させて頂いておりましたが、このたび正式に入会させて頂く事になりました、名前は飛松裕太と言います。

二〇〇六年頃に初めて中上さんの朗読会に行き、そのイベント終了後に話しかけ自分が書いて



た大学の卒論を渡しました。それはビート文学についての大雑把な論文で、ケルアックの翻訳者である中上さんに読んでもらうことなど想像もしていませんでしたが、とにかく渡して、それから主にハガキの上で中上さんとお話しさせて頂くようになったきつかけに始まり現在に至ります。

会長、そして油本さんと川端さん、推薦者となつて頂きありがとうございます。これまでに詩のグループや会に所属していた事はなく、挨拶代わりになるような詩集も持ち合わせていない流れの身ですが、より多くの詩や言葉に触れながら自分自身に何が書けるのか問い続けるつもりです。よろしくお願います。

揉んでください

原田もも代

滋賀県産。春日部、練馬、世田谷、シドニーと渡り歩き、新百合丘にたどり着いて三十余年。千支は戌。先祖はたぶんワライカワセミ。横浜とは無縁です。

入会の動機は、人間のそれもハマッこのしゃれた香りに少しでも染まれたら、という不純かつ切実なもの。

詩作は試行錯誤の繰り返し。

人をなす奥底のものが見えないところまでつながり、お互いに影響し合っている自然、社会、世界、宇宙。見えず、触れず、不確かな輪郭、それさえおぼろな確かな存在。そんなものを今ある日常の姿との間に横たわるものとしてとらえていきたい。表現はなるべく普段の自分の生活に引き寄せて、と心がけています。

さまざまのこと、これは書くのをやめるまで、いえ、生を終えるまで続くものと覚悟しています。よく馴染むようしつかり揉んでいただきたい。



デツキチエア

久高島に行ってきました

広瀬弓

東京・渋谷の映画館アップリングで、昨年十二月二十七日から今年一月九日まで上映し、連日満席の好評につき追加上映されたドキュメンタリー映画があった。その名も『イザイホウ 神の島・久高島の祭祀』。沖縄・久高島で十二年に一回午年に行われる神事で、島に生まれ育ち島の男に嫁いだ三十歳以上の既婚女性の、神女となるための就任儀礼イザイホウ（一九六六年）が記録され封印されていた幻の映画である。

野村岳也映画監督は記者会見で、「撮影の翌年、久高島で初号試写会を開いたが、その時イザイホウを司った神人（かみんちゅ）の女性たちから『この作品はあまり世に広めたくない』

という思いが伝わって来た」それで長らく封印していたことを告白した。「四十年あまりが経過し時代が変わった。人間の生活の原型が残っている久高島は、現代の社会では突出して、このような生活が世に広がれば嬉しい」と、この度の午年の公開に踏み切ったことを明かした。

ところで、私が東京での映画上映を知ったのは、現地の交流館に貼ってあったポスターである。今回のイザイホウも前回、前々回同様中止になったとはいえ、祭礼の日にあたる旧暦十一月十五日（二〇一五年一月五日）から十八日までの四日間を過ごすため、島を訪れていた。

高速船が到着し宿に荷物を置くやいなや、私はレンタサイクルを走らせていた。漁港の上にある拝所を皮切りに、七つの井戸（ガー）や御嶽（ウタキ）や浜巡りに出かけていった。

島は東西に長さ約三、二キロメートル、幅南北約〇、七キロメートル、周囲もわずかに八キロメートルにすぎない。定期船の往復する南西端の徳仁港が島の表玄関である。北東のはずれ一帯はカベールと呼ばれ聖域とされている。ここは島が生まれる時一番最初に浮き上がった所で、先端の岬は、沖縄の祖神アマミキヨがニライから最初に来臨した霊地だという。東側の伊敷浜に白壺が流れ寄り、中から出て来た麦、粟などから五穀発祥の地と信じられてきた。島のほぼ中央にあるクボ御嶽は沖縄の七御嶽の一つに数えられ男子禁制で、現在は一般人の立ち入りも禁止されている。耕地はノロなど一部の神人の土地を除いてすべて共有地で、島民は地割制度に従っている。神話や伝説や歴史は言い伝えとして今なお月ごとのさまざまな祀りや行事に生きていく。特異な風習は島民の誕生に婚姻に葬送に受け継がれ、そうした島の生活を守る新たな神女を生むための儀礼がイ

ザイホウであった。

この貴重な民俗に注目してきたのは、民俗学者や宗教学者ばかりではない。数多くの芸術家や文学者を惹きつけてきた。柳田国男、折口信夫はもちろんのこと、岡本太郎は一九六六年のイザイホウ体験を著書『沖縄文化論』に記している。写真集『神々の島 沖縄久高島のまつり』の文章を谷川健一、写真集『イザイホウ 沖縄・久高島』を吉本隆明が書いている。また、私の好きな詩集の一冊である石牟礼道子の『はにかみの国』の中にも久高島は登場している。私にとって久高島は未知の神秘でありながらふいに目覚める深層の記憶、あるいは日本人の原初の思いへ帰る架け橋である。そこには自然と神、神と人間の明確な姿形が存在している。道ですれ違おうおぼあちはまぎれもなく島の神人である。神々しく感じるのは私だけではないだろう。野村監督の封印した気持ちも、世に広げたい気持ちもわかる気がした。